労に謝し、また今後は仏教図書館協会の手に移されたという昭和卅一年以降の続々編たる目録が一日も早く編集出版されることを祈つて紹介の筆を擱く。（B6版　七三八頁　別に索引収録雑誌一覧表二〇八頁　百華苑発行　定価一、七〇〇円）

（藤井　学）

秋田県史

旧版『秋田県史』の刊行されたのは、明治末、大正初年のことに属し、当時としては先進的な県史とはいえ通史としての体裁にも乏しく、研究者の不便をかこつていたところである。このたび「その後多くの新資料が発見整備され、また一方史学の発達などから補修の必要にせまられており、この際新秋田県史を刊行して、県治の沿革をたずね、文化の発達と民政の由来するところを明かにし、正しい県民の姿を総合的に把握する」ために、新『秋田県史』の刊行が始められたことは、学界にとつてもまことに喜ばしい処置として歓迎するところである。全巻完結にはなお時日をかさねばならないであろうが、現在までに刊行された分について、とりあえず紹介しておきたい。

考古篇　秋田県――出羽国といえば、すでに平安の昔より石器の発見が記録されて、石器―縄文時代研究の宝庫である。旧県史では、考古学は全く無視されていたが、大和久震平・奈良修介氏の努力によつて生れた本書によつて、秋田県考古学のすべてがまとめられることになつた。個々の資料・遺跡の紹介は、五十頁に及ぶ写真版の他、写真・凸版を豊富に用いて、懇切であり、さらに歴史時代―鎌倉・室町の金石文や経塚等をも含めて、秋田県考古学のすべてを、まことに要領よく整理されている。欲をいえば内容の豊富さに比べてスペースの少なすぎることであるが、これはかかる性質のものとしてはやむを得ない。さらに、研究史に特に一章を設け、遺跡地名表と文献目録を附載することは、他に例をみない本書の特色であり、研究者に便ならしめるところが大きい。（A5判四七五頁　写真五〇頁　昭和三十五年三月刊）

資料　古代中世篇　は、はじめに綱文を掲げ、次に関係資料を列記する大日本史料の形式により、秋田県関係の古代中世（慶長六年まで）史料のすべてが網羅されている。記紀以下各種記録や軍記物が、特に古い時代において中心となるのはやむを得ないが、小鹿島文書・新戸部文書・鬼柳文書・色部文書・戸沢文書・岩屋文書・秋田藩採収文書・秋田藩家蔵文書・秋田家文書等が、それぞれの日付に従つて配列され、（年未詳は巻末に一括）さらに秋田氏・小野寺氏などの系図・家譜をまとめている。秋田県関係の各種史料を博捜された今村義孝・半田市太郎氏の努力には敬服する他なく、古代・中世史の研究、また近時著しく研究の進められている秋田藩政史の研究に益するところまことに大なるものがあろう。（A5判八〇五頁　昭和三十六年三月刊）

第四巻維新篇　は、ペリーの来航より廃藩置県による秋田県の誕生までの通史である。この期間だけに一冊五四八頁を宛てているのであるから、その間の政治過程について実に精細に記述されている。しかも幸い宇都宮帯刀の日記・戸村十太夫の諸記録等、中心資料がよく保存されている関係もあつて、原史料も多数引用して叙述を進められている。編者山崎真一郎氏には、すでに秋田県政史への執筆があるが、氏の造詣の深さをしのばせるに十分であり、単に地方史の域をこえて、明治

維新の政治過程の研究に大きな問題を提起しているといえよう。（A5判五四八頁　昭和三十六年三月刊）

資料　明治篇（上下二冊）は、山崎真一郎氏を中心に編まれ、秋田県庁・秋田図書館傑蔵の各種記録を、件別・日付順に集大成されたものである。上巻には戊辰の形勢、藩県政治の実施、兵備・県治行政一般、税財制、勧業（明治二十三年まで）の項目に分つて計七一四件、下冊には以後明治末年にいたる県治行政一般・勧業・税財政及び明治初年以来の交通・通信土木・学制・社寺宗教・社会について計六五九件の資料を掲げる。その中には、整理されて統計表化されたものもあるが、大多数は原史料のまま印行されている。その整理の仕方には、問題なしとしないが、明治期の資料が、かくも多数「資料集」として印行されることは他に例をみないところで、学界に益するところ甚大なものがあり、関係者の英断に敬意を表したい。（上冊A5判一一二〇頁昭和三十五年三月刊　下冊一一六三頁昭和三十六年三月刊）

文芸教学篇　は、書道・漢詩（石田直太郎氏）藩政時代教学・文芸（吉成直太郎氏）短歌・狂歌・俳句（石田玲水氏）明治以降文芸（佐藤鉄章氏）絵画（太田桃介氏）等の項目にわかつて叙述され、最後に教学編年表を附している。それぞれエキスパートの筆になるだけに、何れも津々たる興味を抱かせるというべく、しかもかかる編纂方針自体、ユニークなものとして注目すべきものがある。（A5判八〇六頁昭和三十六年三月刊　以上共に秋田県発行）

以上、既刊の分について雑駁な紹介を試みたのであるが、全巻の完結が待望される次第である。

（熱田　公）

岩村町史

岐阜県恵那郡岩村町といえば、現在は、総人口約八千人、美濃・信濃の国境に近い山間の、強いて特色も見出されないような町である。しかしここにも、豊かな歴史の歩みがあつた。このほど刊行された『岩村町史』は、岩村藩、岩村城史に造詣の得に樋田薫氏はじめ青木理平・日比牟良・鶴見善一・三宅理造氏ら郷土学会を組織して研究を進められていた人々の、五ケ年にわたる調査・研究の成果である。岩村町の歴史は、まず、現存する二十二基の古墳の解明からはじめられる。中世では、遠山荘の所在地であり、その地頭には、関東御家人として著名な加藤景廉が補任され、子孫は遠山氏を称して、土岐氏と並立する豪族として繁栄をとげる。その過程は、岩村藩各種文献記録をはじめ伝説にいたる迄を博捜して、語られている。近世は、岩村藩二万石の城下町として経営され、大給松平氏、ついで丹羽氏、さらに大給松平氏の所領となる。代々藩主の事蹟についで、文政年間、丹羽瀬清左衛門を中心とする藩政改革と、それをめぐる農民の動向が、興味ある問題を提示している。さらに「町方家並帳」はじめ城下町岩村をめぐる問題、岩村藩の地方支配の問題等、歴史家垂涎の問題を展開している。一方文化面では、峰翁祖一を開祖とする大円寺、江戸時代の宗教、岩村藩学と知新館など、岩村町の特色をとらえた記述が行なわれ、明治維新と岩村藩士族の動向についで近代の発展が叙述され、さらに教育・軍事・字名一覧、方言、植物等いわば「郷土誌」が記述され、最後に郷土年表が附載されている。以上、本書は恵那郡地方史の、また岩村